

【学年】 5年	【教科・単元など】 国語「詩を味わおう」（全五時間）
【実践内容】 ○単元目標 声の出し方、そろえ方、読み方などを工夫して、群読の楽しさを味わうことができる。 ○実践の概要 ①教科書の教材文、三木露風「晴間」、北原白秋「海雀」、三好達治「雪」の中から好きな詩を選び、情景を想像しながら一人で何度も読む。 ②想像した情景を発表し合って、みんなで声をそろえて読む。 ③北原白秋の「山かつぎ」を群読する。（参考資料「楽しい群読脚本集」家本芳郎編脚色） ・役割を決める。・読み方を考える。・声の調子を工夫する。・声の大きさを合わせる・・・等 ④ビデオで録画したものをしながら、改善点を話し合い、さらに練習する。 ⑤完成した群読をビデオ鑑賞する。 知的好奇心について この学習で知的好奇心としてとらえる部分は、3点ある。1点目は、小田原ゆかりの人物である北原白秋の詩を扱うということである。教材文の「海雀」とは違う雰囲気を持つ「山かつぎ」を紹介し、北原白秋が様々な詩を読んでいることを知り、「他の詩を読んでみよう」という知的好奇心につながるだろうと考えた。 2点目は、「山かつぎ」の群読をする場面である。子どもたちは、群読を行った経験はほとんどないため、「みんなでそろえて読みたい」「うまく声を重ねていきたい」という知的好奇心につながると考えた。今回は、元々ある脚本をもとに、自分たちで工夫できる範囲で修正を加えていった。今回の経験が、今後自分たちで群読をつくってみたいという願いにつながると期待したい。	
【子どもの様子・反省】 北原白秋について知っている子どもはあまりいなかったが、教材文の中で子どもたちに人気があったのは、「海雀」であった。小田原ゆかりの人物だと紹介したことも原因かもしれないが、北原白秋には、かなり興味を持ったようで、校外学習で文学館の近くを通ったときにも、中に入りたいと言っていた。「海雀」は、どのような情景を詩にしたものなのか想像することが難しい子どももいたが、みんな楽しく読んでいた。 群読は脚本があるので、それに基づいてソロやアンサンブルなど、役割を分けた。ただし、全員がソロをやれるよう、多少脚本は変えた。始めは、言うタイミングや声をそろえる部分が合わず、子どもたちも苦労していたが、慣れるにしたがってできるようになってきた。何度も練習をしてタイミングと声をそろえる部分が合ってくると、「ここはもっと～した方がいい。」というような声が聞かれるようになり、ビデオで確認してから考えることになった。ビデオを見ると、声の大きさをその時々で変えていかないと、他の声との調和がとれないことや様子が伝わらないということに、子どもたちは気づいた。気づいた部分を再度練習して、最後のビデオ撮りをおこなった。この群読が一番うまくいったと、子どもたちも満足していた。 このように、「北原白秋」と「群読」は、子どもたちの知的好奇心に訴えることができた。時間があれば、北原白秋の詩についてさらに調べ、自分たちの好きな群読をつくっていくこともできたかと思う。	